

Title	27 : 東京歯科大学水道橋病院における低年齢児の齲蝕罹患状況と進行度
Author(s)	田村, 梨恵; 富永, 早紀; 根本, 研吾; 棚瀬, 稔貴; 田中, 亜生; 辻野, 啓一郎; 櫻井, 敦朗; 新谷, 誠康
Journal	歯科学報, 120(4): 510-510
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10130/5399">http://hdl.handle.net/10130/5399</a>
Right	
Description	

## No.27: 東京歯科大学水道橋病院における低年齢児の齲蝕罹患状況と進行度

田村梨恵, 富永早紀, 根本研吾, 棚瀬稔貴, 田中亜生, 辻野啓一郎, 櫻井敦朗, 新谷誠康  
(東歯大・小児歯)

**目的:** 近年の歯科疾患実態調査によると小児の齲蝕は大きく減少しているが, 大学病院小児歯科の来院動機は, 齲蝕治療の患者が増加傾向にある。過去の当院の実態調査では, 乳歯列期にあたる幼児期で齲蝕治療を来院動機にするものが多く, 乳歯萌出期から乳歯列期初期に相当する3歳以下の患者が3割を占めていた。そこで我々は, 低年齢児の齲蝕罹患状況と進行度を把握する目的で, 2016から2018年の3年間に齲蝕治療を来院動機に本院小児歯科を受診した3歳以下の患児を対象に, 齲蝕罹患歯数および齲蝕進行度の調査を行ったので報告する。なお, 本研究は東京歯科大学倫理審査委員会の承認を受けて実施した。(承認番号: 929)

**方法:** 2016から2018年の3年間に齲蝕治療を来院動機として本学水道橋病院小児歯科を受診した3歳以下の初診患児336名(男児194名 女児142名)を対象とし, 診療録を参考に齲蝕罹患歯数および齲蝕進行度について調査を行った。齲蝕進行度は歯髄除去療法を行わずに歯冠修復を行っているものをC2, 生活歯髄切断あるいは抜髄を行っているものをC3-A, 感染根管治療, 拔牙を行っているものをC3

-Bとした。

**結果:** 1人平均齲蝕歯数は1歳(54名)3.7歯, 2歳(135名)4.9歯, 3歳(151名)6.6歯であり対象者全体では5.4歯であった。1歳では上顎切歯部に多く, 上顎Aで75歯(44.6%), 上顎Bで65歯(38.7%)であった。齲蝕進行度を歯種別にみると上顎乳切歯では年齢が上がるにつれC3の割合が増加していた。白歯部に関しては上顎と下顎で進行度に違いがみられた。Eでは2歳でC3が上顎43歯中4歯(9.3%), 下顎52歯中8歯(15.4%)であったのが, 3歳では上顎124歯中24歯(19.4%)下顎が176歯中62歯(35.2%)と下顎で進行度の大きいものが増加していた。

**考察:** 齲蝕進行度をみると年齢が上がるにつれC3の歯が多くなり, 齲蝕罹患後に早期に進行する傾向が認められる。また, 白歯部では, 上顎より下顎の方がC3の歯がより多かった。上顎に対し下顎で齲蝕進行度がより強くなる理由は明確ではないが, 上顎乳白歯部は耳下腺開口部に近いために自浄作用が働き齲蝕の進行抑制に関与している可能性が考えられる。

## No.28: 小児のフッ化物配合歯磨剤の使用状況 ～来院患児のアンケート調査から～

濱口翔一<sup>1)</sup>, 櫻井敦朗<sup>1)</sup>, 本間宏実<sup>1)</sup>, 田中亜生<sup>1)</sup>, 田村梨恵<sup>1)</sup>, 辻野啓一郎<sup>1)</sup>, 大多和由美<sup>2)</sup>, 新谷誠康<sup>1)</sup>(東歯大・小児歯)<sup>1)</sup>(東歯大・障害者歯科・口腔顔面痛)<sup>2)</sup>

**目的:** フッ化物は歯質を強化し, 抗菌作用を発揮して齲蝕予防作用を示すことが知られている。また, フッ化物配合歯磨剤は家庭でも簡単に取り入れやすいフッ化物利用法である。現在国内で流通している歯磨剤のうち, 約90%がフッ化物配合歯磨剤となっており, 近年, 1,450 ppmのフッ化物配合歯磨剤の販売も開始された。そこで本研究では, 東京歯科大学水道橋病院小児歯科を受診した患児を対象とし, 小児の歯磨き習慣やフッ化物配合歯磨剤の使用状況に関する実態調査を行った。なお発表にあたっては, 対象患児を来院動機をもとに齲蝕治療希望(齲蝕群)と齲蝕治療希望以外(非齲蝕群)の二群に分け, 結果の比較を行うこととした。

**方法:** 対象は2018年3月から2019年11月の期間中に東京歯科大学水道橋病院小児歯科を受診し, 調査参加への同意を得ることができた16歳未満の患児202名である。調査項目は年齢, 主訴, 家庭での歯磨剤使用の有無および頻度, 使用している歯磨剤のフッ化物配合の有無と濃度である。本研究は, 東京歯科大学倫理委員会の承認を経て行った(承認番号859)

**結果:** 対象患児202名のうち, 齲蝕群は102名であ

り, 非齲蝕群は100名であった。家庭で歯磨剤を使用する者に関しては, 齲蝕群と非齲蝕群との間で有意な差は認められなかったが, 本人磨きに毎回歯磨剤を使用すると回答した者は齲蝕群で38人(37%)であったのに対し, 非齲蝕群では60人(61%)と有意に高い割合を示した。また, フッ化物配合歯磨剤を使用している患児の割合は高いが, 年齢に応じた適切なフッ素濃度や歯磨剤の量を正しく理解して使用している保護者は少なかった。

**考察:** 本人磨きの際に歯磨剤を必ず使用する割合は齲蝕群に比べ非齲蝕群で有意に高く, フッ化物配合歯磨剤の使用頻度は齲蝕の有無と程度に影響を与えている可能性が示された。歯磨剤の齲蝕予防効果がよく知られている一方で, 歯磨剤を使用しない例や, 年齢に応じた歯磨剤の使用をしていない例, 歯磨剤に含まれているフッ化物の有無や濃度を把握していない例が多くみられた。歯磨剤の適正利用についての知識の普及は十分でないと思われ, 今後, 年齢や成長を踏まえたフッ化物配合歯磨剤の適切な方法での利用をより推奨する必要がある。